

資料 3

平成21年度 第1回 学校運営協議会議事録

平成21年5月11日(月) 19:00～20:30

於：秋津小学校 2階 会議室
司会：山口，鮎川 記録：井桁

<参加者>

- | | |
|--------------------------------------|------------------------------|
| 小野千亜希 (秋津小PTA会長) | 齋藤勝 (秋津小PTA副会長) |
| 鮎川由美 (秋津まちづくり副議長, 地域住民) | 齋藤鉄男
(学校体育施設利用団体代表, 地域住民) |
| 原田靖久
(社会福祉協議会秋津支部長, 地域住民) | 菅久 (秋津小校長, 学校教職員) |
| 山口喜弘 (秋津小教頭, 学校教職員) | 山田芳実 (秋津小教務主任, 学校教職員) |
| 井桁淳子 (秋津小研究主任, 学校教職員) | 天笠茂 (大学教授, 学識経験者) |
| 井上隆夫
(教育委員会指導課長, 行政機関職員) | 寄主義之
(教育委員会青少年課長, 行政機関職員) |
| 麻生美智子
(人権擁護委員・学校支援ボランティア代表, 校長推薦) | 竹林輝夫
(学校支援ボランティア代表, 校長推薦) |
| 橋村清隆 (秋津コミュニティ会長, 校長推薦) | |

習志野市教育委員会から

- 1 指定書辞令交付
- 2 教育総務部長より

学校運営協議会委員 自己紹介

第1回学校運営協議会会議

- 1 役員選出
会長...鮎川由美さん, 副会長...小野千亜希さん
- 2 報告事項
(1) 平成20年度第3回学校運営協議会議事録
資料1に基づいて山田が報告。
- 3 協議事項
(1) 平成21年度学校経営の基本方針について
資料2に基づいて菅校長が提案。
拍手をもって承認。
(2) 今後の活動方針について
資料3に基づいて山田が提案。

・学校が考えていることは、各担任を通して懇談会の折に保護者に伝えている。

・学校側が考えている活動方針について、保護者としっかり話をすること。

・今年度の研究で、育てたい姿、子どもの心の在り方・関わり方をどう取り組んでいくのか話し合うことで「たくましい子ども」という学校目標につながっていくのではないかと。

・ボランティアの立場からすると、具体的に学校の要望があれば動くことができるが、自分からどうするということはできない。先生方から、こんなことをやってほしいということを伝えてほしい。

4 その他

・他地域での学校支援活動の状況について

佐倉市, 香取市佐原, 四街道市, 市川市にも広がってきている。

流山市...地域支援ホーム作りを行っている。

習志野市...秋津小学校がスタートなので、もっとしないに広めたい。

・支援ボランティアについて

公民館のサークル活動をしている方々は、人に教えたいという要望もあるかと思う

資料3

ので、サークル活動をしている方との関わりも持てるとよい。
学校支援の中から、遊び支援ボランティアを募ってもよいと思う。

次回開催日 10/5(月)19:00～

平成21年度 第2回 学校運営協議会議事録

平成21年10月5日(月) 19:00~20:30

於：秋津小学校 2階 会議室
司会：山口，鮎川 記録：井桁

<参加者>

小野	千亜希	(秋津小PTA会長)
齊藤	勝	(秋津小PTA副会長)
橋村	清隆	(秋津コミュニティ会長)
鮎川	由美	(秋津まちづくり会議副議長, 地域住民)
原田	靖久	(社会福祉協議会秋津支部長, 地域住民)
齊藤	鉄男	(学校体育施設利用団体代表, 地域住民)
麻生	美智子	(人権擁護委員・学校支援ボランティア代表, 校長推薦)
竹林	輝夫	(学校支援ボランティア代表, 校長推薦)
井上	隆夫	(教育委員会指導課長, 行政機関職員)
寄主	義之	(教育委員会青少年課長, 行政機関職員)
天笠	茂	(大学教授, 学識経験者)
菅	久	(秋津小校長, 学校教職員)
山口	喜弘	(秋津小教頭, 学校教職員)
山田	芳実	(秋津小教務主任, 学校教職員)
井桁	淳子	(秋津小研究主任, 学校教職員)

1 委員長あいさつ

鮎川 遅れて申し訳ございません。本日もよろしくお願ひいたします。

2 校長あいさつ

菅 本校では、新型インフルエンザの発症者は今のところなく、濃厚接触者ということで数名お休みしている。明日から6年生が修学旅行で、実施できそう。
ボランティアの方にお世話になり稲刈りが済んだ。とてもいい米が収穫できた。子ども達は、餅つきを楽しみにしている。
ピオトープの改修工事においてもみなさんにご協力いただき、着々と進行中である。
学校評価については、調査項目の文章表現など難しい事があったが、みなさんのご指導を受けて進めていきたい。

3 報告事項

(1) 第1回学校運営協議会議事録について

井桁 (資料に基づいて報告)

(2) これまでのパートナー会議および教育活動について

井桁 (資料に基づいて報告)

4 協議事項

(1) 学校評価の公表資料について

山田 (資料に基づいて提案)

天笠 この資料について、先生方は目を通したのか。この学校運営協議会の会議の前に職員会議等で先生方の意見の交換があったのか、まだないのか。

山田 今日、職員会議があり、先生方は今日初めて目にした。

天笠 その時どんな意見が出たのか。

山田 多くの意見は出なかった。

天笠 学校評価の段取りというものが大切。

まず先生方が意見の交換をし、その結果をこの場に持ってきてほしい。そして、それが適切か不適切かを我々が評価させていただきたい。

先生方がこの結果を見て何を感じたのか、何を考えたのかということが、この場で学校評価のもつ意味を考える上できわめて重要である。それがないのならば、この場をもつ意味がない。

改めて、先生方がこの結果を見て、自分達の指導が適切だったのか、そうでなかったのか、あるいはこの学校の運営の仕方はどうなんだろうということを私たちにお伝えさせていただきたい。

学校評価の結果を基に、「自己評価」と言われる先生方の評価をしていただき、その次に「学校関係者評価」を行う。つまりこの場の委員で先生方が出された評価を基に評価を行う。その結果を報告書にまとめていただき、教育委員会に報告するというのが法令上の定め。また、ここで評価させていただいたことが適切か不適切かということは、習志野市教育委員会が第三者的な立場で評価していただき、我々が評価を受けるとというのがステップ。

菅 学校側での検討がなされないままであった。天笠先生と井上先生には、早急にこれから検討し、後ほど送らせていただき見ていただくようにする。他の方は、パートナー会議で検討いただくようにする。準備不足で申し訳なかった。

鮎川 今日出された資料について、質問やご意見、感想等あれば出してほしい。

小野 上学年になるといろいろなことをシビアに見ている。小さい子は、「自分がやってるよ」という思いがそのまま結果に表れている。

天笠 私が欲しいデータは、先生方が「我々はがんばっているよ」というものだ。例えば、P.8, P.9に出ているデータについて、先生方がこう思った、このことについてはこのような取り組みをしていたが功を奏さなかった、先生方はこう見ているが保護者はそのことについて十分ご理解いただけてない等、このような話が出てくる可能性があると考え。そういうことを巡って話し合いができると、このデータが貴重なものとなってくる。

井上 学年によって差が出てくるとは思うが、気になったのが6番の設問「私は教室で思ったことや考えたことをきちんと言っています」というところで、教室で何でも話せる環境がつくられているのかなということを感じた。子どもと保護者と先生方とで評価に差がある。「きちん」という言葉が設問にあるので、子ども達はもとらえたのか。学級の改善をするならば、受動的な理解、共感的な理解、子ども達同士が高め合う環境作りをする必要があるのではないか。これだけのデータなので何とも言えない部分もあるが、ここが印象に残ったところ。

齋藤 あいさつという部分での話すはよくできている。

竹林 話す・聞くということについて、高学年になると先生の話すを「聞く」ということができているのか疑問。

麻生 地域のデータは、まだ集まった数が少ないとのこと、データによってははっきりしていないものを出してしまっているのかどうか。

4番については地域の方にはよく分からないことで難しい。

菅 地域の方は子どもの一部分しか見ていない。その子にとって、地域の方と話している場面をよくとってもらっているが、もしかしたら自分では教室でよく話せないとその子自身が思っているのかもしれない。

鮎川 教室ではおとなしい子が、地域の方と話している時は上手に会話できるということもある。

菅 いずれも回答数が少ないので、何とも言えない。もう少し回答が増えれば変わるかもしれない。

竹林 話しかけてくるのは決まった子ども達。

原田 先生方と子ども達の回答のギャップが大きいところが、どうして出てくるのか探ってみることが大切ではないか。また、先生方が実態を真摯に受け止めるべきところも必要では。

橋村 設問の意味を子ども達がどうとるか、高学年と低学年とは違うだろう。設問が難しい。また、「書く」ということにおいて、子どもにとっての「書く」と大人にとっての「書く」ではとらえ方が違うのではないか。

- 原田 自分が回答するのに、クラス全体を見てよしとするのか、特定の子ども達ができているよしとするのかということに迷った。
- 橋村 保護者レベルはいいが、あまり子どもとかかわっていないボランティアのデータはどんなのかと思う。
- 小野 子ども一人一人描く100%が違う。他人から見た100%はまた違うだろう。少ない子ども達の中でこのようなデータの中から、一つ一つ探っていくことが必要なのかなと感じる。このようなデータの中で先生方はやってないじゃないかということを感じはしないか。
- 天笠 先生方の指導において、こんなにがんばっている部分があるが、この部分が足りないのではないかとこのデータから読み取って検討するのが我々の仕事であり、求められる役割。そこを自覚する必要があるのではないかと。先生方も我々も同じように秋津小の子ども達やこの学校をよくしていこうとするのが共通する土台。
9番の設問である「書く」というところが学力の一番の基盤。教師が少し甘く評価してはいないかを感じる。子ども達や保護者はシビアに見ている。先生方にはもう少し踏み込んでみて欲しいところ。
半年後に、こここのところがどう修正されたかということを確認させていただきたい。
- 鮎川 今回、年度内に目標を達成できるようにと評価を早めたので、先生方のやりとりを早めにやっていただき、残りの半年間に反映させていくのか、結果的にどういうところまで行ったのか、次年度の目標を立てるのに生かされるようにしたい。
設問の文章を単純にしたり項目を少なくしたりしたことがよかったのかどうか、我々も勉強になった。
- 橋村 子どもにとっても単純がいいが、大人にとっては具体的に書いておいた方が評価がしやすいのではないか。
- 原田 作文というのは、その子の資質がよく見える。このようなアンケートではこれでよい。
- 小野 書くことの指導は、家庭では難しい。
- 天笠 小学校生活において、一人の先生だけでなく秋津小学校の取り組みとして指導していけば力をつけることができる。この学校の姿になるとよい。
- 麻生 2年生は、お年寄りへの手紙を書く。初めは先生のお手本をまねして書くが、8回目には自分の意志で書くようになる。8回続けることで文章も字も上手くなる。
- 天笠 そのようなことを学校全体で積み上げていくことで、子ども達の力は違ってくる。今のような話を先生方に伝えていただき、先生方の実践に反映させていただける。
- 原田 「書く」ということはとても大切。
- 井上 書いたものを基に、次は話すということが出来る。コミュニケーションをつくるのにとっても大事なこと。
- 原田 本を読むということもやらなくなっている。
- 井上 子ども達の世界が広がるのだが...
- 鮎川 いろいろなことに取り組んでいる地域の子は、その取り組みに多く参加しているし、たけている。書いてそれを表現することの大切さを実感した。
秋津も「書くこと」「話すこと」に力を入れて取り組むことで変わってくるのではないかと。教育についてのことなので、プロの先生方が中心になって取り組んでいければ、地域あげて、「書く」大会を催すなどのイベントにつながるのでは。
ボランティアと人なつっこく話す子は、どちらかというクラスでは上手く話せていない子か。ボランティアが入ることで話すきっかけがもてることは素晴らしいことなのかもしれない。
- 小野 クラスに限られた友達や先生といることは、居心地の悪いこともあるかもしれない。クラス単位以外で心の通う人がいることはいいことでは。
- 竹林 今年は、教頭先生の案で田んぼの学習において、ボランティアに対して先生方が来て欲しいとお願いするのではなく、子ども達が手紙を「書く」という働きかけをするようにした。それも「書く」ということへの一つのよい方法。
- 鮎川 自分達の学習において、ボランティアがどう働きかけたら来てもらえるのかということを知るということを教師側やボランティア側が仕掛けて行くことも大事。

- 麻生 2年生は、もうやっている。子ども達の手紙と先生方の手紙をポスティングしている。子ども達の手紙があるから、地域のお年寄りも運動会に行こうとか、行けない時にはお返事を出す人もいる。
- 小野 「話す」ということで先生方によって取り組み方は違うとは思いますが、1時間に一度は発表する場をもたせてくださる先生もいる。本人にとっていやなことでも、何回も場数を踏むことで発表することが身についてくるのか。
上学年になるほど発表することがいやになるし、先生が無関心で発表しないままとなってしまうことが気にかかる。
一分間スピーチなどの場において、「今度はどうしようかな」と子どもが考えるステップがあるような工夫があるといい。
- 天笠 中学校で、不登校気味のお子さんは教室の外と中とで様子が違う。同年代のかかわりだとドキッとさせられるような場面もあるが、外で幼児とかかかわっている姿や行動はとても自然。
- 原田 不登校の中学生の子ども達を見ていると、なぜ不登校になるのかわからない。普通に対話できるし、大人とのかかわりはとても自然。
- 天笠 大人とのかかわりには、安心感がある。学級集団の中で安心できる温かい学級作りはとても大切。
- 原田 同年代の中では、うまくいかないんですか？
- 天笠 自信がない。一步踏み出せると、すんなり学級集団に入っていけるんですが。
- 鮎川 学年が増すごとにそういうことがある。
秋津の子どもは、幸いなことに中学に進んでも不登校になる子は他校より少ない。
- 麻生 七中の先生から聞いたが、秋津の子どもは小学校の6年間「学校大好き」が身についたため自然に学校へ行ける。
- 天笠 子どもの姿を通して、学校評価をすることはいいこと。
運動会の後、秋津ならではの行事の後など、アンケートをすることはあるのか？
- 鮎川 秋津まつりの後は、アンケートをとる。
- 天笠 常にアンケートではなく、「モニター」であるこの場にいらっしゃる方に意見や感想を伺うとよい。時には、運動会はどうだったかとレポートを書いていただくとか、子ども達と一緒に給食を食べながら学校を見つめるといったこともあってほしい。そのような中で先生方に対する私達の目を深めていくことが大事。学校側もそのような機会をもって、我々の役を担っていただけるようにしたい。

5 その他

(1) 第12回公開研究会について

山田 (資料に基づいて説明)

鮎川 ビオトープということができましたが、パートナー会議を超えて資金調達も行っている。一般の方々にもご協力いただいている。

費用が足りず、银杏をとって子ども達が実を踏んで、秋津まつりで募金活動をする事になっていることや、PTAの方で改修工事の活動時に麦茶を入れるなど中心になって活動していること、人が集まらない、資金が足りない等の広報をどのような形で行っていくかということ公開研究会の発表で行いたい。他の学校の先生方に知ってもらうことで役に立つかもしれない。

小野 今のPTAの中からも地域の後継者になってほしい。

見つけていくにはどうしたらよいか？

天笠 即効薬はないので、常に働きかけをしていくことが大事。

一緒に汗をかくということはこういうことだと伝え、次のランナーをみなさんで見つけていって欲しい。

鮎川 PTAのお父さん方の中から、次の地域のことは自分達でやっていかなければという気持ちを持ち始めていて、30周年の記念行事に向け、少し動き出している。そういう方々がパートナー会議に参加してくれるようになるといい。そのきっかけをどうしたらよいか。

天笠 かかわるきっかけがあるといい。きっと今中心になっていらっしゃる方々がとても巨大に見えるのかもしれない。

竹林 運動会の時に多くのお父さん方が参加していた。そんな方が仲間になってくれるはず。ビオトープの改修工事の時に木に登って銀杏を落としてくれた人がいる。そういう方々に声をかければ、次回も来て下さるはず。

橋村 学校に来れば楽しいよということを知らしめればよい。

原田 遊びの会をつくれればよい。

天笠 30周年記念ということで、できたらこの学校の在校生と卒業生とみなさんが「大切にしたい言葉」をつくりだしてみてもいい。その言葉でみんながつながることができるというような校訓，教育の理念や価値観，人生のモットーとなるものを周年行事として考えてみては。

- (2) 次年度の学校運営協議会の開催日について
 次回の開催日は、3 / 1 (月) の予定。

平成 21 年度 第 3 回 学校運営協議会議事録

平成 22 年 3 月 1 日 (月) 19:00 ~ 20:30

於：秋津小学校 2 階 会議室

司会：山口，鮎川 記録：井桁

小野千亜希 (秋津小 P T A 会長)
齊藤勝 (秋津小 P T A 副会長) (欠)
齋藤鉄男 (学校体育施設利用団体代表, 地域住民)
菅 久 (秋津小校長, 学校教職員)
山田芳実 (秋津小教務主任, 学校教職員)
天笠茂 (大学教授, 学識経験者) (欠)
寄主義之 (教育委員会青少年課長, 行政機関職員) (欠)
竹林輝夫 (学校支援ボランティア代表, 校長推薦)

橋村清隆 (秋津コミュニティ会長)
鮎川由美 (秋津まちづくり副議長, 地域住民)
原田靖久 (社会福祉協議会秋津支部長, 地域住民)
山口喜弘 (秋津小教頭, 学校教職員)
井桁淳子 (秋津小研究主任, 学校教職員)
井上隆夫 (教育委員会指導課長, 行政機関職員)
麻生美智子 (人権擁護委員・学校支援ボランティア代表, 校長推薦)

委員長あいさつ

鮎川 秋津小が学校運営協議会制度となって 4 年目になりますが、内容的にこれでいいのかどうか。4 月に式典をさせていただく事になりました。招待状を送りますのでみなさんご参加下さい。

校長あいさつ

菅 先日の義母の葬儀の際はお心遣いいただきありがとうございました。
2 年 1 組が 2 学期に続き、インフルエンザで学級閉鎖となりました。2 年 2 組も明日の朝の様子で学級閉鎖となるかもしれません。6 年生を送る会があるので開催ができるか心配です。感染性胃腸炎の方もまだおさまっていません。
30 周年の件では、お世話になります。幼稚園、小学校と地域で一緒に行っていきます。

報告事項

1 第 2 回学校運営協議会議事録について

井桁 (資料 1 に基づいて報告)

2 これまでのパートナー会議および教育活動について

井桁 (資料 2 に基づいて報告)

原田 1 年から 6 年までいろいろな活動を行っているが、子ども達は楽しんでいるのか?

井桁 ふれあう活動をすることに、学年によって違いはあるかもしれませんが、満足しているし多くの子どもが楽しんでいる。

山田 ふれあいを核にした授業を行うことを楽しんでいる。

原田 高齢者はとても子どもとのかかわりを楽しみにしている。次の活動の予習をしている方がいるし、高齢者にとってためになっている。

小野 父母と考え方の違う人がいるんだということを学ばせていただける場。家族の中では得られないし、情操面での教育になっている。

原田 子どもとふれあうことで、大人も有意義な時間を得ている。

小野 背中を押してもらえないとやれないことではある。

協議事項

1 平成 21 年度学校教育目標重点項目への取り組みについて

山田 (資料 3 に基づいて提案)

< 資料 1 >

- 井上 12月に出された学校評価の公表資料で、高学年の子ほど厳しい見方をしている。
- 山田 厳しい見方をしているのは確か。低学年はほめられることの相乗効果でよりよく改善さえていくが、高学年ほど改善されにくい。
- 竹林 高学年ほど恥ずかしいが先に立つので、最近はなるべく、側に来るまでこちらからあいさつをしないように待っている。言わない時はこちらから声をかける。4回くらい繰り返すとあいさつしてくれる。
- 斉藤 低学年は大きな声であいさつするが、高学年は頭を下げるような子もいる。
- 麻生 素直にあいさつできるのは3年生まで。資料のグラフ通り。高学年は、できるのにできないと自己評価している。
- 竹林 中学生になると、またよくあいさつしてくれるようになる。
- 小野 あいさつや礼儀は、部活動に入っているとうるさく言われるのでできている。
- 麻生 一番は家庭。
- 原田 自意識が芽生えとできなくなる。大人が一番できていない。まずは、地域の大人が、辛抱強く恥ずかしくないという雰囲気を作れるように習慣化させていけばよい。
- 鮎川 明るくあいさつすることで、雰囲気がよくなる。
- 橋村 家族の中であいさつしていないのか？町中であいさつしているのはよく見かける。
- 原田 家族内であいさつを行うようにした。始めはあいさつするのは大変だった。しかし、家庭内がすごくいい雰囲気になった。
- 麻生 他の地域に比べると、秋津はよくあいさつしている。
- 橋村 『進んで』という言葉があるので、高学年になると「自分からやっていない」と評価が厳しくなるのではないかな？
- 原田 2年生の元気のいいこと、明るいことはとても気持ちのよいことだ。
- 麻生 一年間通してのかかわりだからこそ、明るくできることではないかな。
- 鮎川 先生方の指導で、お手紙や活動の感想等を書くことが、ボランティアにとっての宝物であり、喜びや励みになる。書くことを習慣化したい。
- 竹林 5年の米作りや
- 麻生 2年の交流活動のお礼の手紙をいただいた。
- 原田 自分の興味あることで文章を書くと言うことをするとよいのではないかな。パソコンやケータイのメールではいけない。
- 橋村 何もなくて書くことは難しい。
先日のユニホックの大会で、先生方が試合に出ていた。
子ども達が先生方のそういう姿を見ることも大切なのでは？
- 斉藤 スポーツを通して仲間を増やすことがいい。子の地域で子どもがやっているスポーツは屋外が多い。
- 橋村 ぜひ先生方もチームを作って参加してほしい。
- 小野 自分がどう動けばいいのかということスポーツによって身につけることができると秋津まつりの時の子どもの行動から感じた。チームでやるスポーツを自分もやればよかった。まんべんなくいろいろやればいい。
- 井上 「体をきたえる」の質問項目として「マラソン・縄跳び・鉄棒をよくしている」とあるが、高学年ほどその特定の運動はしていないと評価が低くなる。難しく答えさせるようになっていないかな？質問項目の考慮をすべき。
- 鮎川 子ども達は、給食をよく食べているのかな？
- 山口 残菜は少ない。5年生のセカンドスクールでも完食した子が2/3ほどと多かった。
- 原田 食べることの遅い早いの違いが大きい。同じものばかり食べている。
- 菅 学校では、三角食べを教えている。
- 原田 箸の持ち方もできていない。
- 斉藤 親の食べ方を見て育つ。

原田 昔は、しゃべらずに黙って食べるだったが。

菅 今は、楽しくはなしながら食べようという文化。

山口 ワンプレートなので、持たずに食べるようになっている。

斉藤 親が洗うのが面倒でワンプレーとになってしまっている。

鮎川 様々な国の文化もあるが、家庭がしっかりしつけていくことが大事。先日、食育で、お箸の置き方、お椀の持ち方など教える機会を持つことがあった。本来親がすべきことではあるが、そのようなことをやっていくべき。

2 平成 22 年度の学校評価計画について

山田 (資料 4 に基づいて提案)

菅 評価項目の言葉については、見直しをしていきます。

3 平成 22 年度の学校経営の重点について

菅 (資料 5 に基づいて提案)

鮎川 校長先生の言うとおり、秋津の子には闘争心がない。チームワークはいいが、攻撃する子がいない。

原田 今の子は、困難に耐えるとか向上心がない。

橋村 あふれかえっている世の中だからか。

小野 親が、昔に比べ自己中心的で甘い面があり、それを見て子どもが育つ。

原田 子どもを突き放す事が大事。そこから真剣にやる気持ちが芽生える。

鮎川 うまくいく例とそうでない例がある。

麻生 秋津は環境がよすぎる。今日行った O 小学校では、子どもが多く校舎も冷たい感じがした。書くことができないのは、まずは読まなければだめと知り合いの大学の先生に言われた。

菅 研究としてのふれあいはなくなるが、秋津のよさをよりよくしていけるよう進めていきたい。

原田 女子より男子を鍛えてほしい。

その他

1 平成 22 年度学校運営協議会の大まかな開催日について

次回の開催日は、5月の予定ということで、天笠先生の予定を聞いて決定する。

井上先生から

この元気や何でも言い合えることが大事。来年もよろしくお願いします。